

論題	相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について
著者	神沢勇一
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— (神奈川県立博物館研究報告) 第1号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1968 年 (昭和 43 年) 3 月
判型	JIS-B5 (182mm × 257mm)

相模湾沿岸地域における弥生式 土器の様相について

On the phase of Yayoi-type pottery
at the coastal area of Sagami Bay

神 沢 勇 一
Yūichi Kanzawa

1

酒匂平野、余綾丘陵、相模川下流域および秦野盆地をふくめた相模湾沿岸の地域においては以前から東海地方的な弥生式土器の存在が注意され、それらは東海地方から伝播し、南関東本来の土器と共存するものと理解されていた。

しかしながら、この地域内には須和田式土器から前野町式土器に至る諸型式の存在は認められず、東海地方的な土器が主体をなしており、土器の様相は東京湾沿岸を中心とする南関東本来のそれとは明らかに異なっている。

文化の地域性を反映する土器に相違があるところから、私はさきに、この地域に南関東とは別個の文化圏が存在することを指摘したのであるが、その根拠を具体的に説明する機会がなく、また未解決の問題も幾つか残っていた。そこで、改めて相模湾沿岸の弥生式土器の様相と地域性の問題を取りあげ、その後の知見を加えて同地域における文化圏の存在と性格について述べてみたい。

2

本論をすすめるについて、まず相模湾沿岸地域における土器の型式と特徴をあげておかなければならない。この地域の弥生式土器には、発掘調査による一括資料は少ないが、器形、文様、製作手法および諸遺跡における共伴関係等により、少なくとも6型式の存在が認められる。各型式の概要は次のとおりである。

(1) 堂山式土器(1-3)

神奈川県足柄上郡山北町堂山遺跡出土土器を標式とする型式である。

壺形土器、鉢形土器、浅鉢形土器が知られるが、壺形と鉢形の分離はあまり明瞭ではない。

壺形土器は頸が太く、胴の張りが強い。上半部の器面に、篋と櫛状施文具で簡素な文様を描き、下半部には斜行条痕または縦走羽状条痕をつける。1の器形と文様は代表的なものである。磨消縄文もみられるが、例は少ない。口縁は押捺を加えた凸帯や刻目で装飾し、内面に文様をつけた例もある。

鉢形土器は、変化の幅が比較的広く、甕形や壺形に近い形状を示す例もある。口縁は押

捺、刻目、稀に押捺を加えた凸帯や山形の小突起をつけて装飾する。器面には、口縁から頸部付近までは横に、それ以下の部分では斜または縦走羽状条痕をつけるのが普通である(2)。

壺形土器と鉢形土器は施文の状態や条痕の形状が類似し、とくに両者にみられる縦走羽状条痕は堂山式土器を特徴づけるものである。なお、壺形土器および鉢形土器の底には、網代様の圧痕や木葉痕を残すことが多い。

小型浅鉢形土器は晩期縄文式土器の精製土器の系統をひくものである。完形土器がないため細部の形状は明らかでないが、口縁に山形の小突起をつけ、沈線で変形工字文風の文様や平行線文を描いた例が多く、丹彩が盛んである。

(2) 中里式土器(4)

神奈川県小田原市中里遺跡出土土器の一部、同秦野市平沢遺跡出土土器が示す型式である。集落址である中里遺跡の名称をとって、中里式土器と呼ぶことにしたい。^(注4)^(注5)

いまのところ、壺形と鉢形以外の器形は双口土器と思われる異形土器が知られるだけで、組成に不明な点を残している。この型式では壺形土器と鉢形土器が明確に分離し、前者は精製土器、後者は粗製土器の姿をとって存在する。

壺形土器は、いわゆる長頸長胴の特徴をもち、太い篋描き沈線と節の粗い縄文に、磨消手法を併用して描いた円文・弧文・重三角文・X字文等が文様帯の中心になっている。丹彩を施した例もみられる。胴下半部には粗い条痕を斜めにつけ、底に網代様の圧痕や木葉痕を残す場合が多い。変形として頸部に膨みをつけて瓢形にした壺形土器がある。

鉢形土器にはまだ完形の資料はないが、一般に口縁部がわずかに外反する単純な形をとるものであるらしい。器面に粗い条痕を斜めにつけ、口縁から胴上半部にかけて、横走羽状条痕を描くことが多く、その代わりに、櫛状施文具で縦の平行線を粗い間隔で引いた例も稀にみられる。これらは(この地域に限って言うならば)いずれも堂山式土器の条痕の退化した形と考えられよう。口縁には刻目や押捺をつけており、底に網代様圧痕または木葉痕を残すことが多い。なお、この型式には1例だけ、布痕のついた底がある。

(3) 小田原式土器(5-8)

神奈川県小田原市谷津遺跡出土土器を標式とする型式である。

組成は、壺形土器、小型壺形土器、鉢形土器、小型鉢形土器の4種類が知られている。^(注6)

壺形土器は細口で頸が長く、最大幅が下部にあり、安定した形である。形状の変化として複合口縁が現れ、また胴下半部に器体形成のさいの接合部分が稜になって残るようになる。縄文帯、平行櫛目文、波形櫛目文、櫛目の擬流水文などで飾るほか、丹彩が一般化し、器面を篋で研磨している。文様を省略した例も少なくない。

小型壺形土器は普通の壺形土器を小型化したものと広口の壺形土器(6)があり、後者には口縁に穿孔したものがみられる。高さはいずれも15~20cm前後である。

鉢形土器は口縁部が大きく開き、胴部の膨みが少ない。口縁は刷毛状器具と指頭を用いて押捺を加えるため、小波状を呈する。器面に刷毛目をつけ、頸の部分に篋で横走羽状文を描くのが特徴である(8)。

小型鉢形土器は、分厚な作りの粗製土器が多く、装飾をほとんどつけていない。

小田原式土器においては、形と文様が繊細になり、組成・文様・製作手法などに、以後の諸型式との強い関連が認められる。

(4) 赤羽根式土器 (9-11・27・30・31・39)

神奈川県茅ヶ崎市赤羽根遺跡出土土器の一部が示す型式で、同遺跡の名称をとり、赤羽根式土器と呼ぶことにしたい。^(注7)

組成は、壺形土器、小型壺形土器、鉢形土器、高坏形土器が認められる。

壺形土器は最大幅が胴のなかば以下にあるため、外観がいちちく形を呈する。口縁部が漏斗状に外反し、頸から胴への移行は漸移的で、下半部に稜をもつ。文様は平行櫛目文、波形櫛目文、櫛による羽状刺突文をつけることが多く、縄文は少ない。丹彩はかなり盛んである。口縁には複合口縁と素縁の2種類があり、素縁の壺形土器は一般にやや粗製で、装飾を加えない傾向がみられる。

小型壺形土器には、普通の壺形土器と形が異ならないものと無頸壺形土器の2種類がみられる。

鉢形土器は口縁部がゆるやかな「く」字形に外反し、胴の最大幅は中位にあり、脚がつく。口縁に刻み目または押捺を加え、器面は刷毛目を残すのが普通である。脚のつけ根に凸帯をまわした例が少なくない (27・30)。

高坏形土器には完形の資料がないため、形状を推察し難いが、脚はかなり出土しており、坏部は一般に浅いようである。脚は内側に円錐状の空間を残し、器面に平行櫛目文、櫛による羽状刺突文をつけて飾ったものが多い (39)。

(5) 千代式土器 (12-17・29・32・34・35)

神奈川県小田原市千代遺跡出土土器の一部が示す型式で、千代遺跡の名称をとり、千代式土器と呼ぶことにしたい。^(注8)

この型式の新しい部分に、伊勢湾沿岸地域の土器、およびその模倣品が伴出することがある。

組成は、壺形土器、小型壺形土器、鉢形土器、高坏形土器のほか、浅鉢形土器があるらしい。

壺形土器は口縁部が大きく外反する。頸と胴が明瞭に分離し、胴の膨みが大きくなるため、下半部の稜はあまり目立たない。平行櫛目文、波形櫛目文、扇状文、羽状刺突文等で文様帯を構成している場合と縄文帯をめぐらす場合とがあり、文様帯の一部に数個1組の小円板を貼り付ける。口縁には数本1組の隆起線をつけ、口縁部内面にも施文する。丹ま彩も盛んで、口縁部から頸部内面にまで及んでいる。装飾の多い壺形土器と並んで、無文または粗い刷毛目をつけた壺形土器がみられるのは赤羽根式土器の場合と同じである。

12・16は諏訪の前式土器に近い例であるが、12は諏訪の前式土器に入れるべきかもしれない。

小型壺形土器は赤羽根式土器と大差がないが、無頸壺形土器では内傾の度が強くなる (32)。

鉢形土器においては、口縁部が「く」字形に強く外反し、最大幅が下半部に移って下ぶくれの形を呈する。口縁に刻目を加え、器面には粗い刷毛目を残している。

高坏形土器は完形の資料がないが、脚の出土は多い。34・35は比較的よくみられる形である。穿孔は3個で、脚の上半部に平行櫛目文をつけるのが一般的であるらしい。

千代式土器に共伴する伊勢湾沿岸地域の土器およびその模倣品の器形は、壺形が大部分で、稀な例として高坏形や蓋形があり、いずれも瑞穂式土器あるいは寄道式土器等に類例が認められる。17はその1例で、諏訪の前式土器にかなり近い土器に伴出している。

(6) 諏訪の前式土器(18・26・28・33・36・38)

神奈川県小田原市諏訪の前遺跡出土土器のうち、最も新しい弥生式土器の一群が示す型式である。諏訪の前遺跡の名称をとって、諏訪の前式土器と呼ぶことにしたい。

^(注9)組成は、壺形土器、小型壺形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、高坏形土器が認められる。器台も存在するらしいが、確認されていない。この型式にも伊勢湾沿岸地域の土器、およびその模倣品が伴出する。

壺形土器には細部の変化が比較的多いが、一般に頸と胴が「く」字形に屈折し、胴が球状を呈する。下半部の稜は、そのため、かなり弱くなる。丹彩を除いて装飾を簡略した例が多く、文様帯は幅が狭い。文様の種類は千代式土器とほぼ同様であるが、波形櫛目文の高さが減じ、縄文の節はきわめて細かい。幾分粗製の壺形土器においては、装飾はほとんどみられない。

小型壺形土器は壺形土器と形状が異なるものが多いが、頸と胴が「く」字形に屈折するのをはじめ、一般的特徴においては一致している(19)。

鉢形土器も頸が「く」字形に屈折し、内側に稜をもつのが特徴である。この型式におい

相模湾沿岸地域における 編 年

地 域 時 期	東 海 部 (東 部)	相 模 湾 沿 岸 (南 関 東 西 部)	東 京 湾 沿 岸 (南 関 東)
中 期	丸 子	堂 山	(三 ケ 木)
	原 添	中 里	須 和 田
	有 東	小 田 原	宮 の 台
後 期	登 呂	赤 羽 根	久 ケ 原
	飯 田	千 代	弥 生 町
	曲 金	諏 訪 の 前	前 野 町

ては、口縁に刻み目や押捺を加えることはない。

浅鉢形土器には、頸部が多少収縮するものと、そうでないものがあるが、いずれも頸の内側に稜をもつ点で、壺形土器や鉢形土器と同じ特徴を示している。

高坏形土器は36のような大型の土器と高さ10～15cm程度の小型の土器の2種類ある。後者には完形の資料はないが、坏部と脚が「く」字形に屈折し、坏部の形も異なることが知られている(38)。いずれも脚の穿孔は4個で、櫛目文の施文はみられない。

諏訪の前式土器に伴う伊勢湾沿岸地域の土器、およびその模倣品は、東牧式土器または欠山式土器に同定し得るもので、出土量はかなり多い。

器形は壺形土器が最も多く(21・26)、脚の上半部が円筒状になった高坏形土器(37)、脚付壺形土器(33)などがある。

18の胴上半部につけた矢尻形の貼付文や、壺形土器の頸の下端にめぐらした稜のある凸帯(24・25)は、この種の土器から影響を受けたものと考えられる。

各型式の分布については、堂山式土器と中里式土器は、今のところ酒匂平野と秦野盆地に認められるだけであるが、相模川下流域の調査が不十分であるので、分布は多少広がる可能性をもっている。小田原式土器の場合は、相模川下流域まで分布が知られているが、遺跡の数は比較的少ない。赤羽根式土器以後の諸型式は、同一遺跡に重複する傾向が強く、分布は酒匂平野と相模川下流域一帯に認められる。各型式の土器を出土する主要な遺跡としては、別表の諸遺跡を挙げることができる(末尾の地名表参照)。

3

堂山式土器、中里式土器、小田原式土器、赤羽根式土器、千代式土器、諏訪の前式土器の各型式は、器形、文様、製作手法等において、一応連続的な変遷の過程を示している。この序列は、今後1～2の型式が設定されたとしても、基本的には変わることはないであろう。

これらの土器は、隣接する東海地方東部および東京湾沿岸地域における諸型式との対比により、小田原式土器までを中期、赤羽根式土器以後を後期として区分することができ、また堂山式土器は東海地方東部の丸子式土器^(注10)に、中里式土器は東海地方東部の原添式土器^(注11)と東京湾沿岸地域の須和田式土器^(注12)に、以下、小田原式土器は有東式土器^(注13)と宮の台式土器^(注14)に、赤羽根式土器は登呂式土器^(注15)と久ヶ原式土器^(注16)に、千代式土器は飯田式土器^(注17)と弥生町式土器^(注18)に、諏訪の前式土器は曲金式土器^(注19)と前野町式土器^(注20)に、それぞれ並行するものと考えられる。

つぎに相模湾沿岸地域の土器と東京湾沿岸地域の土器を比較すると、両者の間には幾つかの点で明らかな相違が認められる。

まず、須知田式土器に相当する中里式土器が、煮沸形態として、粗い条痕をつけた粗製の鉢形土器をもつことが挙げられる。すなわち、須和田式土器の煮沸形態は千葉県天神前遺跡^(注21)や神奈川県城ヶ島遺跡^(注22)の出土例のように、縄文や篋描き沈線文で飾った鉢形土器であり、この相違は、中里式土器の鉢形土器が、煮沸形態の機能上の制約にしたがって粗製の

形をとるのに対して、須和田式土器においてはそれを破るという、基本的な差につながっている。このことは、須和田式土器の分布が北関東から南関東の一部に考えられることや、縄文式土器から派生した東日本弥生式土器においては、縄文式土器の地域性がそのまま弥生式土器に継承されるという事情から、両者の成立の母体が異なることを示すものと考えられる。

(注24)
小田原式土器以後の壺形土器にみられる胴下半部の稜も、東京湾沿岸地域の土器にはみられないものであって、製作手法の相違を示す点で注意されなければならない。

この稜は小田原式土器に現われ、赤羽根式土器で最も明瞭になり、以後は胴の膨みの増加によって鈍くなるが最後まで存続している。現在までに調査した結果では、後期の壺形土器と小型壺形土器（無頸壺形土器を除く）の胴部以下の破片 2314 個のうち、約 84% にあたる 1964 個に認められた。この比率は、今後資料の増加によって多少変わると思われるが、相模湾沿岸地域の壺形土器に一般的なものであることは誤りない。

(注25)
また、後期の諸型式の装飾に平行櫛目文、波形櫛目文、扇状文、羽状刺突文など各種の櫛目文が一般的に用いられるのも、東京湾沿岸地域の後期弥生式土器と著しく相違する点である。

櫛目文は、とくに赤羽根式土器と千代式土器に顕著で、それらの主要な文様となっており、久ヶ原式土器以後の諸型式が櫛目文系土器の影響を全く受けず、東日本弥生式土器の中でも特殊な存在を示しているのと対照的である。

なお、これに関連して相模湾沿岸地域においては、その東端においてさえ、久ヶ原式土器、弥生町式土器、前野町式土器そのものは存在しないことを強調しておきたい。たとえば、東京湾沿岸地域に近接する神奈川県藤沢市稲荷台地遺跡においても、器形や文様などが類似した例が多少認められるにすぎないのである。

(注26)
伊勢湾沿岸地域の寄道式土器、欠山式土器に同定される土器およびその模倣品が共存するものも、この地域を特徴づける現象とすることが出来る。

(注27)
千代遺跡において出土した 17 は模倣品の疑があるが、同じ文様をつけた丹彩の蓋形土器の破片とともに出土している。

また、前に述べた稜のある凸帯は、21 の頸部の立ちあがりとともに、伊勢湾沿岸地域の後期後半の土器にみられるものであるが、この地域本来の壺形土器にも少なからず認められる。このことは、伊勢湾沿岸地域の土器が流入する頻度が多く、その影響を強く受けた結果と考えられる。この点は、諏訪の前遺跡において、諏訪の前期の資料の約 20% が、欠山式土器およびその模倣品および何らかの形で影響が認められる土器によって占められることから理解できよう。

(注28)

4

以上に述べたように、相模湾沿岸地域の土器と東京湾沿岸地域を中心とする南関東本来の土器の間には、明らかに異なった様相が認められる。その相違は、それらが成立において、すでに異なった系統の縄文式土器を母体にしているという本質的な原因によるものと

考えられる。

相模湾沿岸地域の土器が示す諸特徴が、基本的には東海地方一般の土器と共通していることは、それらが同じ系統の縄文式土器——西日本的な粗製条痕文土器を特徴とする——から派生した結果にほかならない。したがって、この地域の弥生文化は、広い意味で、東海文化圏の一部と考えてよいと思われる。^(注29)

けれども、相模湾沿岸地域の弥生式土器は、隣接する東海地方東部（駿河湾沿岸地域）の土器と比較すると、土器の組成、各器形における形状、文様等に差があり、とくに後期後半においては、伊勢湾沿岸地域の土器がかなり流入し、その影響を少なからず受けるなど、独自の地域性を示している。（なお、伊勢湾沿岸地域の土器の流入経路についてはその量とともに、ある程度純粋な形でみられること、また東海地方東部にはこの種の土器の伴出はほとんど知られないところから、海路移入されたものとしてよいであろう。）^(注30)

文化の地域性を最もよく反映する土器に前述のような相違があることによって、相模湾沿岸地域の弥生文化は東京湾沿岸のそれと明らかに区別されるべきものであり、また、広義の東海文化圏に属しながらも、独自の小文化圏を形成しているものと考えられる。

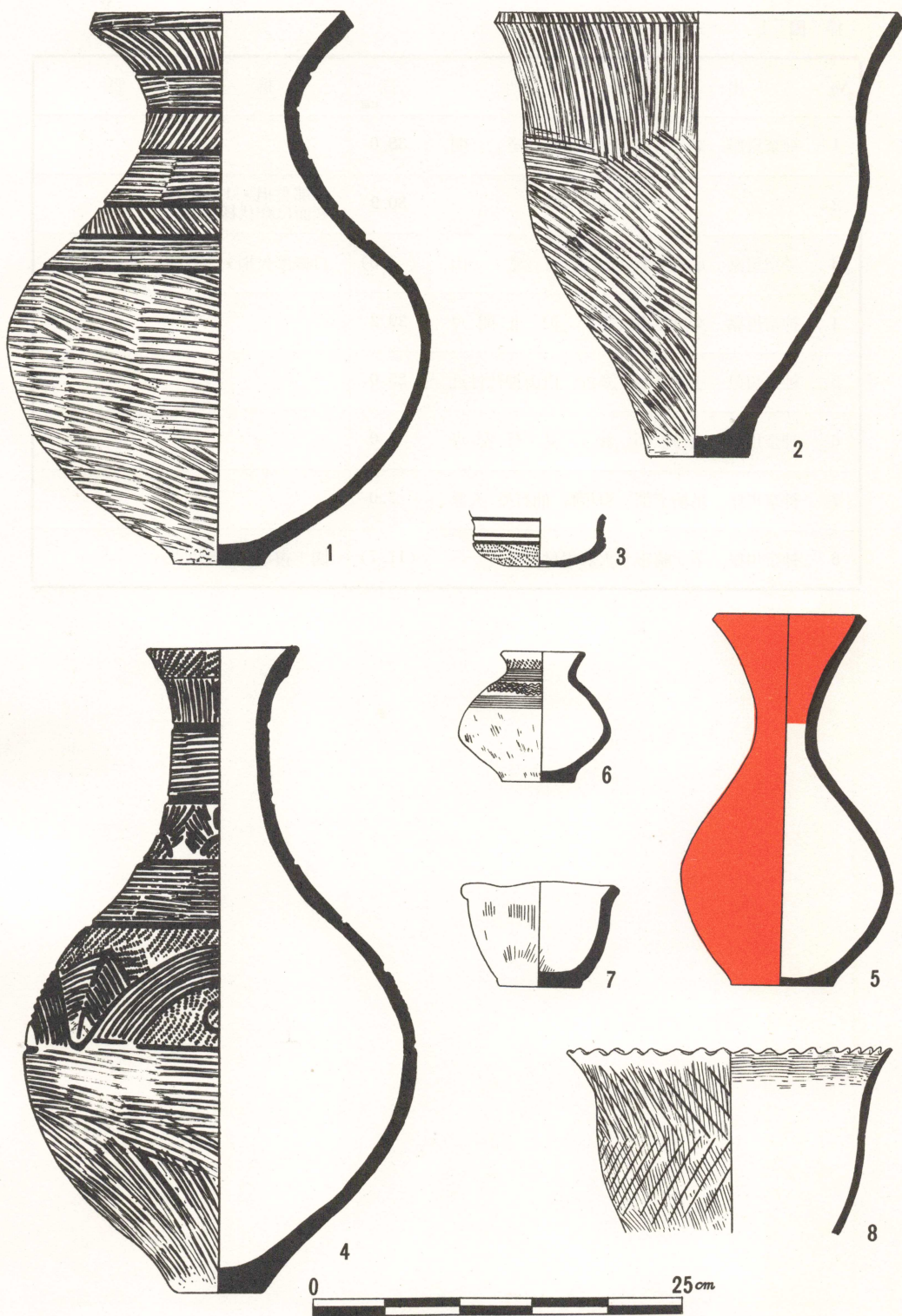
(注)

- (1) 赤星直忠「各地域の弥生式土器・南関東」日本考古学講座4 弥生文化、河出書房(昭和30年)
- (2) 神沢勇一「弥生文化の発展と地域性・関東」日本の考古学Ⅲ・弥生時代、河出書房新社(昭和41年)
- (3) 神沢勇一「足柄上郡山北町堂山出土の弥生式土器」神奈川県文化財調査報告27集、神奈川県教育委員会(昭和37年)
- (4) 杉原荘介「神奈川県小田原市中里遺跡」日本考古学年報9、日本考古学協会(昭和35年)
- (5) 亀井正道「相模平沢出土の弥生式土器に就いて」上代文化25輯、上代文化研究会(昭和30年)
- (6) 杉原荘介「相模・小田原出土の弥生式土器に就いて」人類学雑誌51巻1・4号、日本人類学会(昭和11年)
- (7) 茅ヶ崎市菱沼、長福寺所蔵資料による(注2参照)。
- (8) 神奈川県教育委員会調査資料による
- (9) 杉山博久「神奈川県小田原市府川・諏訪の前遺跡調査略報」(昭和42年)
- (10) 杉原荘介「駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器について」考古学集刊第4冊、東京考古学会(昭和37年)
- (11) 杉原荘介「静岡県安倍郡原添遺跡」日本考古学年報1、日本考古学協会(昭和26年)
- (12) 杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊3巻3号、東京考古学会(昭和42年)
- (13) 杉原荘介「静岡県有東第一遺跡」日本考古学年報1、日本考古学協会(昭和26年)
- (14) 杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学6巻7号、東京考古学会(昭和10年)
- (15) 杉原荘介「土器」登呂前編、毎日新聞社(昭和24年)
- (16) 杉原荘介「武蔵久ヶ原出土の弥生式土器について」考古学11巻3号、東京考古学会(昭和15年)
- (17) 杉原荘介「静岡県庵原郡飯田遺跡」日本考古学年報2、日本考古学協会(昭和29年)
- (18) 杉原荘介「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」考古学11巻7号、東京考古学会(昭和15年)
- (19) 杉原荘介「静岡県静岡市曲金遺跡」日本考古学年報2、日本考古学協会(昭和29年)
- (20) 杉原荘介「武蔵前野町遺跡調査概報」考古学11巻1号、東京考古学会(昭和15年)
- (21) 杉原荘介・大塚初重・戸沢充則・小林三郎「千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器」駿台史学15号、駿台史学会(昭和39年)
- (22) 神沢勇一・浜田勘太「三浦市城ヶ島出土の弥生式土器」横須賀市立博物館研究報告5号、横須賀市立博物館(昭和36年)

- (23) 注 12 参照
 (24) 神沢勇一「神奈川県三ヶ木遺跡出土の弥生式土器」考古学集刊 2 巻 1 号、東京考古学会（昭和 38 年）
 (25) 筆者調査
 (26) 服部清道・寺田兼方他「稲荷台地遺跡調査概報」藤沢市文化財調査報告書 2 集、藤沢市教育委員会（昭和 40 年）
 (27) 久永春男「弥生文化の発展と地域性・東海」日本の考古学Ⅲ・弥生時代、河出書房新社（昭和 41 年）
 (28) 注 9 参照
 (29) 注 24 参照
 (30) 小野真一「駿河湾地方の弥生文化」沼津女子商業高校（昭和 33 年）

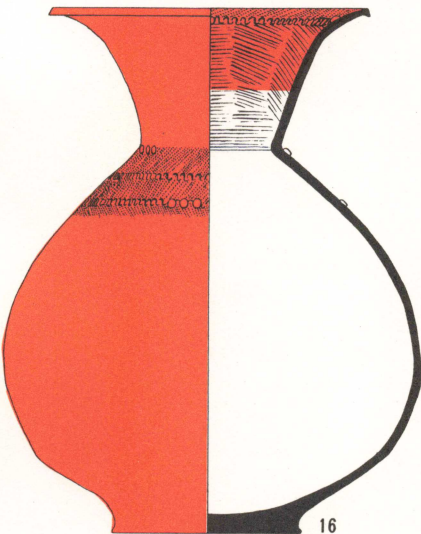
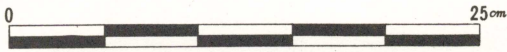
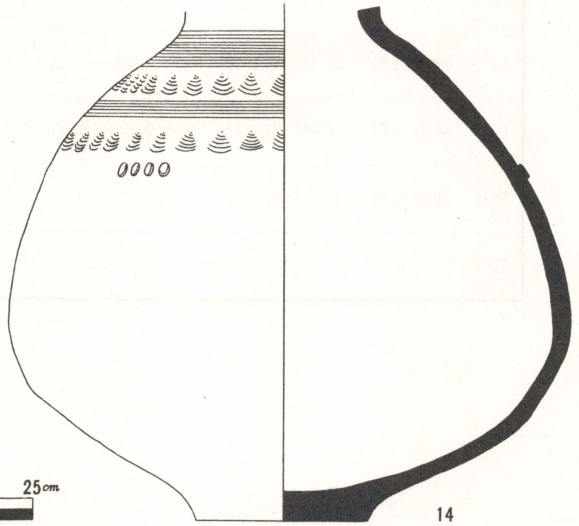
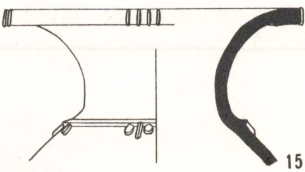
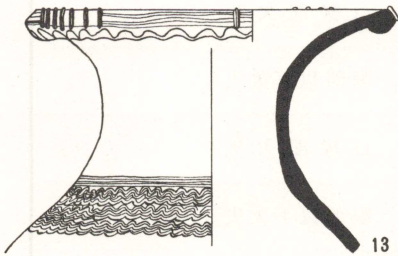
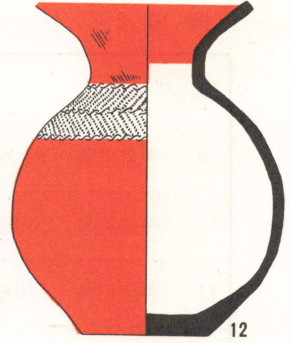
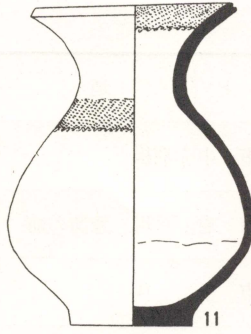
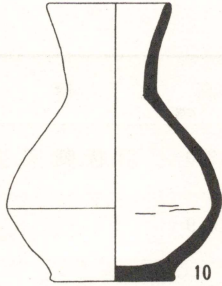
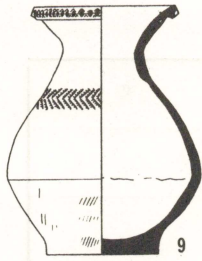
主 要 遺 跡 地 名 表

土 器 型 式	出	土	地
堂 山 式 土 器	・ 神奈川県 足柄上郡	山 北 町	堂 山
	・ 神奈川県 足柄上郡	山 北 町	怒 田
	・ 神奈川県 足柄上郡	南足柄町	福 泉
	・ 神奈川県 足柄上郡	大 井 町	金 子 台
	・ 神奈川県 秦 野 市	平沢南町	道 明
中 里 式 土 器	・ 神奈川県 小田原市	中 里	（大同毛織KK構内）
	・ 神奈川県 小田原市	府 川	諏訪の前
	・ 神奈川県 小田原市	国 府 津	町畑（東亜農業KK構内）
	・ 神奈川県 秦 野 市	平 沢	北 開 戸
小 田 原 式 土 器	・ 神奈川県 小田原市	谷 津	鐘 の 台
	・ 神奈川県 小田原市	多 古	（白山神社付近）
	・ 神奈川県 中 郡	二 宮 町	（光岳院裏）
	・ 神奈川県 高 座 郡	倉 見	行 安 寺
	・ 神奈川県 藤 沢 市	伊 勢 山	
赤 羽 根 式 土 器	・ 神奈川県 茅ヶ崎市	中赤羽根	
	・ 神奈川県 厚 木 市	依 知	中 依 知
	・ 神奈川県 小田原市	国 府 津	町畑（東亜農業KK構内）
	・ 神奈川県 小田原市	千 代	
千 代 式 土 器	・ 神奈川県 藤 沢 市	稲荷台地	
	・ 神奈川県 小田原市	千 代	
	・ 神奈川県 小田原市	府 川	諏訪の前
	・ 神奈川県 平 塚 市		（高麗山東麓）
	・ 神奈川県 茅ヶ崎市	香 川	（香川駅東方）
	・ 神奈川県 厚 木 市	林	（厚木東高校敷地）
	・ 神奈川県 中 郡	伊勢原町	三の宮（比々多神社境内）
	・ 神奈川県 藤 沢 市	稲荷台地	
	・ 神奈川県 小田原市	府 川	諏訪の前
	・ 神奈川県 小田原市	千 代	
諏 訪 の 前 式	・ 神奈川県 足柄上郡	南足柄町	上 の 山
	・ 神奈川県 茅ヶ崎市	円 蔵	ドンドン塚付近
	・ 神奈川県 藤 沢 市	稲荷台地	
	・ 神奈川県 藤 沢 市	稲荷台地	



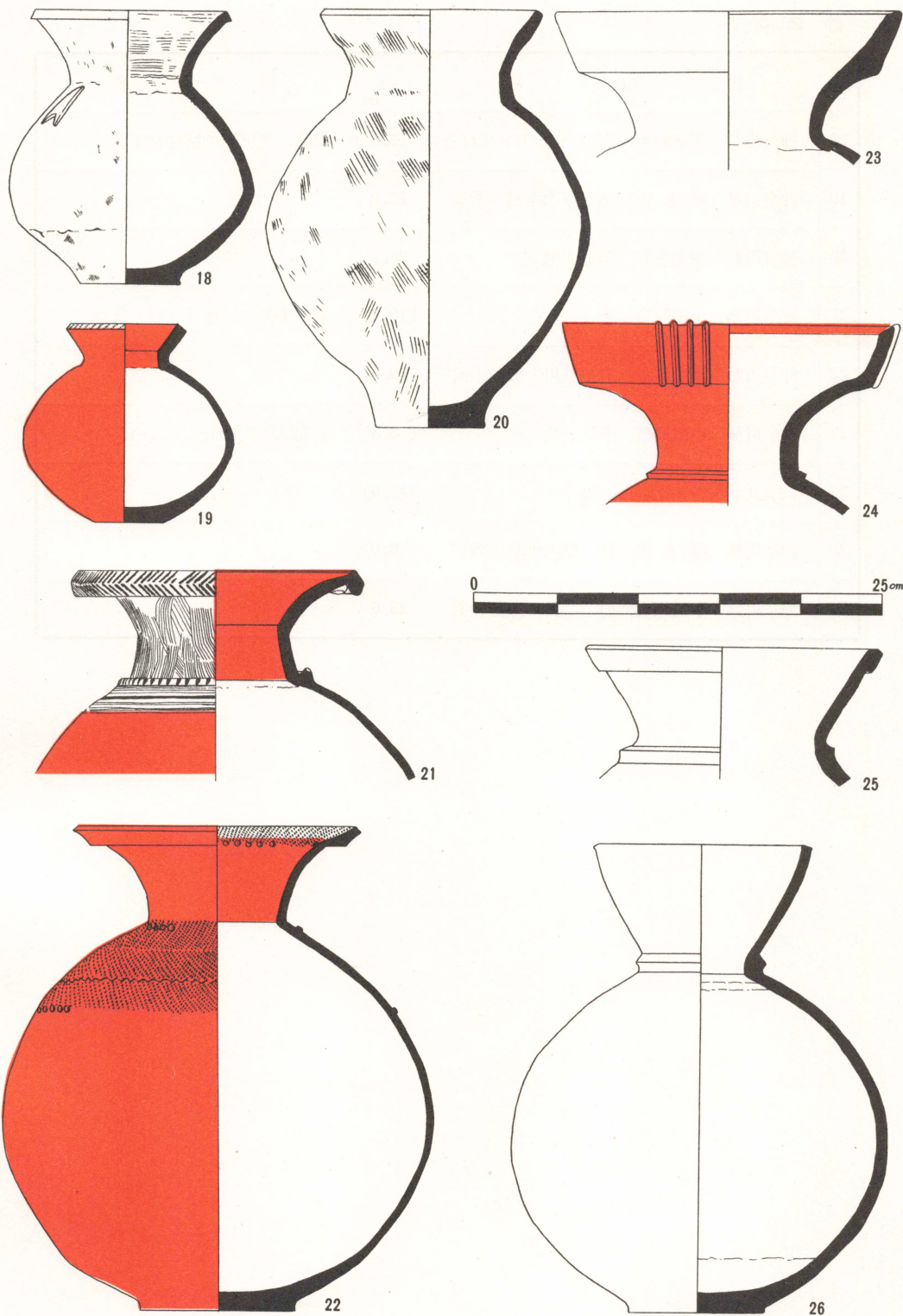
挿 図 1

No.	出 土 地	高 cm	摘 要
1	神奈川県 秦 野 市 平沢南町 道 明	38.0	
2	// //	30.9	一部欠損・1と共伴 底面に網代様庄痕
3	神奈川県 足柄上郡 山 北 町 堂 山	(3.3)	口縁部欠損・上底
4	神奈川県 秦 野 市 平 沢 北 開 戸	29.2	
5	神奈川県 小田原市 多古 白山神社付近	25.0	
6	神奈川県 高 座 郡 倉 見 行 安 寺	9.0	
7	神奈川県 足柄下郡 箱根町 仙石原 大原	7.0	
8	神奈川県 茅ヶ崎市 火葬場付近	(11.7)	図上復原・底部欠失



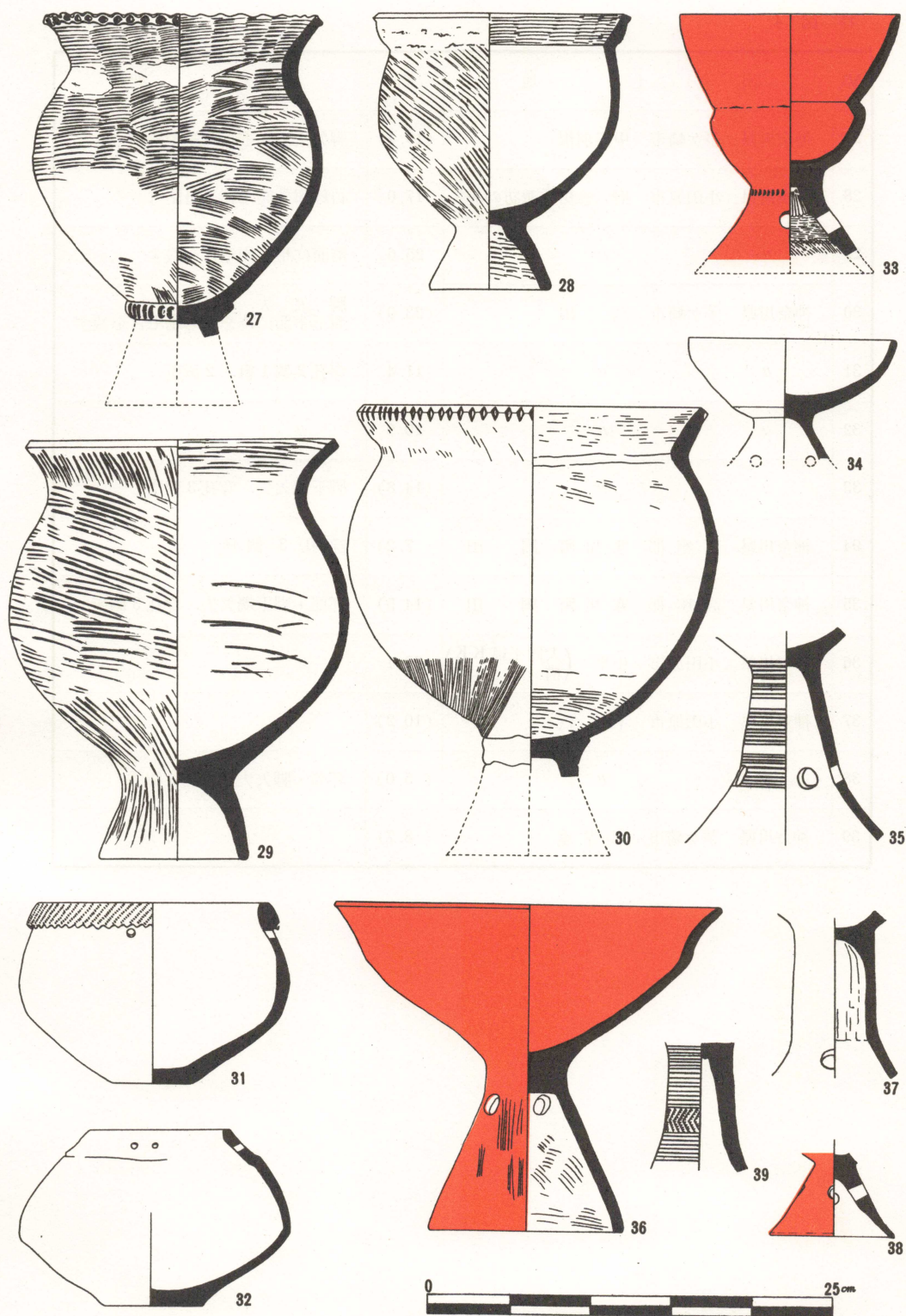
挿 図 2

No.	出 土 地	高 cm	摘 要
9	神奈川県 茅ヶ崎市 中赤羽根	13.0	羽 状 刺 突 文
10	神奈川県 小田原市 府 川 諏訪の前	14.9	
11	神奈川県 小田原市 千 代	17.2	一 部 欠 失
12	// //	(18.0)	口 縁 部 欠 失
13	// //	(12.8)	胴 部 以下 欠 失
14	神奈川県 高 座 郡 寒 川 町 岡 田	(24.0)	口 縁 部 欠 失
15	神奈川県 厚 木 市 林 厚木東高校敷地	(8.2)	胴 部 以下 欠 失
16	神奈川県 小田原市 千 代	(28.2)	口縁部欠失、沈線は鋭い筥描き
17	// //	(24.8)	口縁部欠失、沈線は鋭い筥描き



挿 図 3

No.	出 土 地	高 cm	摘 要
18	神奈川県 茅ヶ崎市 円蔵 ドンドン塚付近	16.8	胴部に矢尻形の貼付文 1 個
19	神奈川県 厚 木 市 林 厚木東高校敷地	12.0	
20	神奈川県 海老名町 国分寺尼寺	25.7	
21	神奈川県 小田原市 千 代	(12.4)	胴下半欠失、楯目は細く乱雑
22	神奈川県 小田原市 府 川 諏訪の前	29.8	
23	神奈川県 小田原市 千 代	(8.8)	胴 部 以 下 欠 失
24	// //	(11.0)	//
25	神奈川県 厚 木 市 林 厚木東高校敷地	(8.0)	
26	神奈川県 小田原市 府 川 諏訪の前	28.6	



挿 図 4

No.	出 土 地	高 cm	摘 要
27	神奈川県 茅ヶ崎市 中赤羽根	(19.4)	脚欠失. 胴下半部篋で研磨
28	神奈川県 小田原市 府 川 諏訪の前	17.0	口縁部外側に粘土紐貼付
29	// //	25.6	器面に粗い刷毛目を残す
30	神奈川県 茅ヶ崎市 高 田	(23.0)	脚 欠 失. 胴下半部に稜をもち刷毛目を残す
31	// //	11.4	穿孔 2 個 1 組. 2 個所
32	// //	10.9	//
33	// //	(14.8)	脚下端欠失. 穿孔 3 個所
94	神奈川県 高 座 郡 寒 川 町 岡 田	(7.2)	穿 孔 3 個 所
35	神奈川県 高 座 郡 寒 川 町 岡 田	(14.5)	坏部・脚下端欠失. 穿孔 3 個所
36	神奈川県 小田原市 中里 (大同毛織KK内構)	20.1	
37	神奈川県 小田原市 千 代	(10.2)	
38	// //	(5.0)	坏部・脚欠失. 穿孔 4 個所
39	神奈川県 茅ヶ崎市 下 寺 尾	(8.7)	



17



文 様 (部 分)

移入または模倣と考えられる土器